

県立美術館に関する論点整理(概要)

芸術会館の現状と課題

現状

昭和52年9月開館し32年間で延べ800万人が利用

①施設概要

用地面積18,925㎡ 建築面積4,345㎡ 延べ床面積7,302㎡
展示棟(展示室1,234㎡) ホール棟(1,010席) 管理棟
駐車場約200台

②収蔵品 約4,500点(田能村竹田、福田平八郎、高山辰雄他)

購入額約38億円 寄贈品等評価額約36億円
※別に重要文化財2点を含む寄託品数百点有り

③管理体制 県教委直営で学芸員6名含む20名体制

④利用状況 昨年度は展示棟約17万人、ホール棟約7万人

⑤利用者の声(最近のアンケート調査の主な声)

- ・照明が反射して作品が見えにくい
- ・弱視者向けに照度を上げて欲しい
- ・芸術会館所蔵品展を見たい
- ・大分県内作家の常設室があっというのでは

課題 I

美術館機能が弱い

①展示スペースが極端に狭く(都道府県平均の1/3未満)常設展示室や県民ギャラリーがなく大規模な展覧会誘致にも支障

②展示室が機能性(移動パテーションや照明・空調設備)に乏しい

③教育普及機能が不足(実習室や情報コーナー等)

課題 II

ホールの役割低下

①芸術会館開館後、コンパルホール、ビーコンプラザ、iichiko総合文化センター等が整備されホールの役割は低下(芸館ホールの約13倍の収容力が整備される)

②今後、大分駅南に新たな複合文化施設(大ホール1,200席等)の整備も予定され、更に低下が予想

課題 III

進む老朽化

①施設・設備を維持していくために必要な保全経費は、来年度から5カ年でホールの舞台周りや空調関係を中心に約16億円に上る

②老朽化に伴いホールは一部の興行を停止中

県内の美術館設置状況と美術ポテンシャル

県内の美術館設置状況

①県立美術館の他県比較
同程度の経済規模の青森、岩手、石川、富山県と県立美術館の展示室面積を比較
・4県平均 3,699㎡
・芸術会館 1,234㎡(約1/3)

②他の美術館の設置状況
次のような美術館があるが、芸術開館の機能不足を十分にカバーできる状況にはない

・公立: 大分市美術館(展示室1,866㎡)、アートプラザ(同1,461㎡)、別府市美術館(同450㎡)、朝倉文夫記念館(同685㎡)等

・私立: 博物館法に基づく登録施設である二階堂美術館や博物館相当施設であるヤマコ臼杵美術博物館等

県内の美術ポテンシャル

①田能村竹田と弟子たちによる南画の伝統

②文化勲章受章者が全体で約70名の中、本県は3名(朝倉、福田、高山)も輩出

③新分野での人間国宝として、竹工芸(生野)、草木染め(志村、父が佐賀県出身)を輩出

④日本芸術院会員は日本画、洋画、彫塑合わせて35名しかいないが、うち3名(中山、岩澤、河合)は本県出身者が占める

⑤その他: 宇治山哲平などのアバンギャルドな作家も輩出
・県美展出品者は九州平均の2倍以上(3,700名)と極めて多い
・首藤コレクション関係者の活動や「混浴温泉世界」の取組もある

※役割が低下したホールは理解を求め廃止の方向

県立美術館の必要性

①芸術会館では県立美術館としての役割が果たせない
・16億円もの保全経費が必要で見直すべき時期を迎えている
・芸術会館は他県の美術館と比較し、展示機能が極めて不十分
・子どもたちの情操教育を進め子育て満足度を高める必要
・購入額38億円、寄贈品含め70億円を超える収蔵品が眠る

②本県出身者の持つ特性を将来につなげていく
・美術ポテンシャルは高く、その特性を将来につなげていく必要
・美術関係者にとっては、芸術会館建設以前からの夢

③地域活性化や観光面での効果も期待される

④購入額40億円、寄贈品評価額7億円を超える収蔵品を保有する大分市美術館に県立美術館の代替を期待するのは現実的に困難

県立美術館のコンセプトの方向

【必ず考慮する必要がある点】

- ①多くの県民に愛され利用されるものでなければならないこと
- ②50年以上使い続けていくものであること
- ③他にない独自性を持つこと
- ④大分市美術館の存在

【検討可能な方向例(キーワード)】

- ①「楽しい」みんなの美術館
- ②「成長する」美術館
- ③「自然(四季)を感じる」美術館
- ④「五感を刺激する」美術館
- ⑤「コアミュージアム」としての美術館
- ⑥「しなやかな」美術館
- ⑦真に「美しい」美術館
- ⑧「音泉」美術館
- ⑨「エコロジーミュージアム」
- ⑩「美術館でない」美術館

県立美術館に求められる機能

- ①十分な展示機能(展示スペースの確保と照明、収蔵庫等関連機能)
- ②鑑賞だけにとどまらない教育普及機能
- ③若手芸術家育成機能
- ④県民が気軽に立ち寄れる憩いや交流の場としての機能
- ⑤県内の美術館等との連携機能
- ⑥ユニバーサルデザインへの対応
- ⑦バーチャル美術館等の情報発信機能の充実
- ⑧時代の流れに対応できるフレキシビリティ
- ⑨建物自体の芸術的価値

現実的な対応の方向

- ①現在地でリフォーム
- ②現在地で建て替え(ホール機能を廃止し美術館に特化)
- ③別の場所に美術館を整備(芸術会館全体の機能廃止)
・立地条件として交通の利便等が必要
- ④芸術会館を現状のまま(ホール機能は廃止)保全して使用

県立美術館の管理運営のあり方

- ①管理運営主体は、直営、指定管理者制度、一部直営の残る指定管理者制度、地方独立行政法人化が選択肢
- ②館長やスタッフには、専門知識だけでなく、経営感覚や企画力、プレゼンテーション能力等も求められる
- ③学校等との連携を強化し、地域に愛される美術館となる必要

第1回大分県美術館構想検討委員会の概要

1 日時 平成22年1月27日(水) 13:30~

2 場所 大分県立芸術会館 講堂

3 概要 芸術会館の課題や県立美術館の必要性に関し以下の議論

○芸術会館はひとつの役割が終了。今までの歴史を踏まえ、次に引き継ぎ展開させる新しい美術館の開設が必要。

○芸術会館がこのままでいいとか、県立美術館がいらないという議論はほとんどないのでは。国の状況など先が見えない中でも、知事は、県民の強い思いがあれば、美術館を造るという判断が可能か。

○(知事) 財政は厳しいが、県民が納得する良いコンセプトができ、やれということであれば可能。

○この場所に本格的な美術館を造るカリファインを行い、大分駅の高架化の駅ビルを何フロアか買い取ってアネックスを。今なら大分駅周辺もチャンス。

○学生の声として、芸術会館は、展示がしづらい、立地場所が中心部から遠い、展示室が小さく大きな展示覧会が見られない、休憩場所もないといった問題有り。

○芸術会館は一世代前の美術館のイメージ。鑑賞以外の楽しみがなく、息苦しさも。もっと利用しやすい場所にあるべき。

○現在ホールがあるので、新たに造るときも500人程度のホールを持って良いのでは。

○本構想委員会での検討は、美術館が柱か、それともホールも一緒にか。

○(知事) ホールは充足してきており、課題として残っているのは美術館機能。ホールの議論を排除するつもりはないが、現時点ではそのような方向で整理する予定。

○美術館の中にある音楽性をソフト面で生かす可能性を考える必要。

○美術だけにとらわれない夢のある総合的なホールが理想。絵画の中で音楽を聴く等新しく大分らしい発想も考えた美術館を期待。

○ホールがあつて良いと言ったが、絵画を飾った部屋で演奏して、お茶を飲んだりできる美術館は大分にそうない。ホールと美術館という今の形でなくても良い。

○展示会開催時のクラシックの演奏、或いはティーパーティの開催など今の美術館は幅広く利用可能。そんなことも考えられる新しい美術館という方向。

○美術館として絶対に持たなければならない機能は妥協せずに用意するが、音楽を含め様々な利用が生まれる自由度を持った場である必要。

○周りに聞くと、大分の作家の収蔵品を見たいので、常時系統立てて見られる空間が必要、教室や工房のような空間が不足しているとの意見。一つの建物に全ての要素を入れると膨大なお金等が必要になる。どこかを中核にサテライトを設ける建築案も検討

可能。最小の投資で最高のサービスが受けられるよう、きちんとした機能の箱を造り、鑑賞教育等のソフト面にお金を。

○美術館は30年周期。人生のサイクルであり、表現方法も30年で大きく様変わり。美術館は時代に対応するソフトが大切。あまり経費をかけない建物を造る。

○人の集まりやすい場所は、物理的なこともあるが、雰囲気も重要。

○県立美術館は点だけで存在するのではなく、県内全域に毛細血管のように様々な作用を及ぼすところまで欲深く考える必要。

○県の顔となる必要。県外、国外からの客も多くなるようなことを考える中での目玉。単なる美術館ではない、教育や憩いの場や集まりやすいお祭り広場にもなる形が目標。

○駐車場を切り離して考えるのは困難。環境整備を行ってこなかったことが、この地のポテンシャルの低下につながったと思うので、場所が適正かどうかの検討が必要。

○この場所は能楽堂の稼働率が低く、今後のありようを考える必要。県の顔という意味で、気になるのが収蔵品がかぶっている大分市美術館との棲み分け。

○どういふものは今後の議論だが、皆さんの意見では、新しいものを考えた方が良いのではという方向。

○難しい問題。美術館が将来どうなっていくか掴みにくい。お金をかけだしたらきりがないので、かけないで洒落たものができるのが夢。多少夢を持って話し合っていき、少しセーブしながら最終的な落としどころを考えるということ。

○大分駅裏に文化ホールができるが、近くに大分市美術館と芸短大があり、これらをトライアングルとして文化ゾーンを造ると良いという意見も聞く。近隣に芸術的な環境があれば、オールインワンは不要。回遊していくことでそれぞれの利用度が向上。

○駅裏に新しい美術館を造るのであれば、この場所をどうするかという議論は重要。性格付けをしっかりと行う必要。場所の選定は将来の移動手段をにらみながら考慮。

○芸術会館は展示スペースが最大の問題。県外者から収蔵品が展示されていないとのクレームやホール利用者との間で駐車場のトラブルも。今後は鑑賞教育が大事で、子どもたちに良いものを見せることが重要。そのためには子どもたちが集まりやすい場所がポイント。お金をかけないとすれば分館方式も検討の対象。

○これからの美術館の方向としては、博物館的な展示でなく、現代の作品に接する機会の提供や体験の場、更には新しい価値の創造が重要。

【委員長総括】今の芸術会館では、県立美術館として十分ではないというのが皆さんのご意見ということで総括。次回はもう少し踏み込んだ意見をいただくこととしたい。今回結論は出ないが、これから荷物を積み船がでるとということで、記録に残すように。

第2回大分県美術館構想検討委員会の概要

1 日時 平成22年3月16日 13:00～

2 場所 県庁舎新館81会議室

3 概要 県立美術館の機能やコンセプトに関し、以下の議論

[機能について]

- 絵画にあった額縁がなくなってきており、時代の変化に対応できる展示の柔軟性
- ある程度の企画展が誘致できる予算措置
- 現代美術への対応も含め学芸員の充実
- 収蔵品をコレクションする機能。予算化は簡単ではないが、若手作家の作品を安価なうちに購入するなど工夫が必要
- 展示だけでなく、創作活動ができる環境や仕掛けが大切
- 子どもの感性を育てる教育普及機能が重要。鑑賞教育にもっと力を入れる必要。参加体験型にも力を。こういった面でのボランティア活用の推進
- 芸短大と連携以上の関係構築（芸短大付属美術館）
芸短大の人材活用や運営委託
- 気軽に調べものができる生涯学習の場としての機能
- 子ども達や幼児を抱える主婦等も利用しやすいように図書館や託児所機能
- 子ども達も楽しめる野外彫刻スペース
- サテライト展示機能（県内美術館等の紹介機能。市町村に分館）
- 収蔵機能の充実
- 隣接道路からの車両の進入等も含めたバックヤードの機能性
- 交流の場としての機能。空間的にゆったりできるスペース
- おしゃれなカフェやレストラン
- 情報発信機能
- 美術館の中だけでなく街に出て行って展開できる仕掛け

[コンセプトについて]

- コンセプトは立地場所（都市型か郊外型か）で変わってくるのではないか
- 公共施設である限りコンセプトを言葉で表すと一般的な表現にならざるを得ないが、美術館としては特徴のあるものが必要
- コンセプトは各委員の意見の平均値をとったとしてもよいものではない
- トリニータのJ2降格やパルコの撤退等で現在元気がないので「人の心を豊かにし、元気にする美術館」
- 全ての機能を集約するのではなくサテライト型(例：竹田市に田能村竹田の分館を)
- コンセプトは「県民とともに成長する美術館」。当初は70%からスタートし、時間をかけハードも成長
- デートスポットになるような美術館
- コンセプトを臼杵石仏等とつなげられないか
- 県庁PT提案の「音泉美術館」は素晴らしい

[場所について（意見を求めているが以下の発言あり）]

- 青森県の三内丸山遺跡のようなある種のポテンシャルのある場所がよい
- 多くの県民ができるだけ来やすい場所。
公共交通機関が集中する大分駅周辺がベスト
- 歴史のある城址公園がよいのでは
- パルコの可能性もあるのでは